厳しい目が注がれる年齢

学年が一つずつ上がり、その分「頑張らなければ」という自覚が生まれた生徒たち。あいさつ、整理整頓、授業、組織決めなど、いろんな場面で頑張っている生徒たちの姿が見られます。しかし、子どもとしての幼さが見られるのも事実で、昨日地域の方から、決して楽観視できない情報をいただきました。

「公園の近くに設置してあるごみ集積場のゲージの中で、三月の終わりに中学生の男の子が正座をしていました。いじめかもしれないと心配でしたので、連絡しました。」

北中生の通学路付近であり、どうやら下校時刻辺りのできごとのようです。早速二、三年の生徒を集めて話をしました。指導というより、知っている人はいないかと情報提供を呼びかけました。現在のところ、知っていると名乗り出る生徒はいないようです。いじめの可能性がぬぐいされない以上、迅速に対処すべきだと考えました。

いじめであれば厳格に指導します。やった側にいかなる理由があろうとも、やられた側がいやな思いをしていれば絶対に許すことはできません。「今の北中は大丈夫」などと安心せず、「いじめはいつでもどこにでも起こりうるもの」という意識で臨みます。

もう一つの可能性があります。若者特有の「ノリ」でやったかもしれないということです。しかし、もしそうだとしても、それが決して世間では認められるものではないということを、中学生になったら理解しなければなりません。

世の中では、それがわからない大人が不適切な動画をネット上に上げ、世の人たちの非難を集めています。今回はネットに上げているのではありませんが、地域の方が心配な事実として情報提供してくださったことを考えると、ネット上で炎上することと同じだと私は思います。「ノリ」という言葉では決して許されないことであることを理解すべきです。

いじめの可能性が否定できませんので、今回は厳しい言葉で表現しましたが、今回の情報提供をきっかけにして、自分には幼さはないかと振り返って成長してほしいと強く思います。

中学生になって自分の判断で登下校するようになったということは、好きなように登下校してもよいということではありません。登下校も大人になる勉強の場だと考え、地域の人たち、自転車、自動車などのことも考え、不快感や心配を抱かせないように地域で生活する人間になることです。

交通ルールを守らない、歩道いっぱいになって歩く、あいさつしない、車が迫ってきても気付かないほど夢中になって話す、カバンを下ろして飛び回って遊ぶ……そろそろ厳しい目が注がれる年齢になっていることを自覚するのが中学生という時期ではないでしょうか。

（四月十三日　記）